

8 月第 3 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 8 月 20 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 13 主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「束縛から解いて」

■聖 書：ルカによる福音書 13 章 10～17 節（新約 p134～135）

■讃美歌：10「今こそ人みな たたえ歌え。」

475「あめなるよろこび 聖なる愛よ、」

昨日 8 月 19 日は誕生日でした。今までの歩みを振り返りながら、今この時が人生で最良の時であると知らされる一日になりました。そしてそれは、安息日すなわち主の日には、よほどのことがない限りは主日礼拝をささげる幸いが与えられた歩みによってもたらされたものでしたから、主日礼拝の意味を深く考えさせられることにもなりました。

さて、本日の聖書箇所ルカによる福音書 13 章 10 節以下には、主イエスが安息日にある会堂で教えておられた時のことが記されています。ルカによる福音書は 9 章 51 節において、主イエスがそれまで活動しておられたガリラヤからエルサレムに向けて出発したと記しています。その旅において、主イエスは安息日ごとにユダヤ人たちの会堂に入り、そこで行われている聖書（私たちの読んでいる聖書では旧約聖書の部分です。）が読まれ話がなされる集会において教えてこられました。本日の箇所では、その会堂に、「十八年間も病の霊に取りつかれている女がいた」と記されています。この婦人はいわゆる悪霊に取り付かれていたということでしょうが、「腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかつた。」という具体的な症状がありました。ここでの癒しの出来事を丁寧に読んでみると、他に記されている癒しの出来事とは異なり、病んでいる人のほうから「わたしを癒して下さい」と願って行われたものではありません。12 節に「イエスはその女を見て呼び寄せ」とあるように、主イエスの方からこの婦人に目をとめて癒しをなされたのです。ある方はこの出来事を「主イエスの教え、説教とこの癒しのみ業の連続性に注目すべきです。つまり主イエスは、今お語りになったみ言葉を、具体的なみ業によって目に見える仕方でお示しになったのだと言えるでしょう。要するに、説教の続きとしてこの癒しのみ業が行われたのです。」と説明しています。主イエスはまず、「婦人よ、病気は治った」とお語りになり、「手を置かれ」ました。すると、その婦人はたちどころに腰がまっすぐになったのです。主イエスがお語りになったこの言葉を元の言葉で見ると、「婦人よ、あなたはあなたの病気から解放された」となります。さらに言えば、病気から解放されたというのは、弱っていた状態から解放されて強くなったということになります。ルカによる福音書の中では、主イエスが様々な癒しをなされたことが記されています。他の箇所では病の霊に「この人から出て行け」と命じたり、叱

ったりなさったこともあります。しかし、本日の箇所では、ただ「あなたは病気から解放された」と宣言することによって癒しをなさったのです。そのことに心をとめておきたいと思います。

ところで、主イエスはガリラヤで伝道を始めて間もなくのころ、お育ちになったナザレにやってきて、安息日に会堂に入り聖書を渡され、そこで開いたところにあったイザヤ書を朗読されたということが4章に記されています。18節の後半から19節に「主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、 圧迫されている人を自由にし、19 主の恵みの年を告げるためである。」と記されています。そこで宣言されている「捕らわれている人に解放を」という御言葉の実現ということが、本日の箇所でも語られていると考えることもできます。そこで、今一度、この言葉が語られた状況を確認しておきましょう。それは、まさに安息日にある会堂で教えておられた主イエスが、目をとめた一人の腰の曲がった婦人に語られたものでした。実は私たちもまた、主日礼拝において聖書の御言葉を一緒に聞き、そこにおいていつでも「捕らわれている人に解放を」という宣言を聞いているのではないのでしょうか。本日の説教題の「束縛から解いて」という言葉も、そのような意味で選んでいます。そして、主イエス・キリストが、私たちの罪を背負って十字架にかかって死んで下さり、父なる神様が主イエスを復活させて下さったことによって、あなたがたはもはや罪と死の支配から解放されているのだという宣言をも、毎週聞いているはずなのです。しかし、私自身の力不足で、主イエスのその恵みの宣言を十分にお伝えできていないかもしれません。そのような中でも、主イエスによる「あなたはもう様々な束縛から解放された」という宣言は、時代を超え場所を超えて、力強く広がっているのです。

ところが、主イエスによるこのような癒しのみ業を見た会堂長が腹を立てたということが14節以下に語られています。彼は群衆に、「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけない」と言ったのです。安息日は、一切の仕事を休むべき日です。週の七日目を安息日として聖別し、その日にはいかなる仕事もしてはならない、ということが、主なる神様がイスラエルの民に与えた十戒に記されています。十戒は律法の中でも最も重要な戒めです。会堂長はユダヤ人たちの宗教的指導者として、人々にこの戒めをきちんと守らせようとしたのです。しかし、安息日に病人を癒した主イエスは、彼にこう言われました。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか」。安息日であっても、つないでいる牛やろばを解いて水を飲ませることをしなければ、動物たちは弱り、場合によっては死んでしまいます。それなのに、十八年間もの間、病の霊に縛られていたこの婦人をその束

縛から解き解放してあげて、どうして安息日にしてはならないのか、と主イエスは会堂長を詰問しています。17 節に「こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなさった数々のすばらしい行いを見て喜んだ」と記しているルカによる福音書の著者もまた、律法主義者たちの偽善に常日頃、腹に据えかねる思いをしていたのではないかと、思わせる痛快な批判が込められているような気がします。

このように見てくると、主イエスがこの日も会堂においてお語りになった解放を告げる説教と、その続きとしての「あなたはあなたを捉えている病気から、弱さや無力さから解放された」という宣言による癒しのみ業と、それに続く、安息日とは解放の記念日であるという話はみんなつながっています。そしてこれらのことは全て、私たちが、礼拝において体験していることなのです。私たちにとっての安息日は、主イエスの十字架と復活によって実現した罪と死の支配からの解放の記念日である主の日、日曜日です。この主の日に、私たちは礼拝に集い、聖書のみ言葉とその説き明かしを通して、主イエス・キリストによって実現した私たちの解放を告げる説教を聞きます。そしてそこには、主イエスが私たち一人一人に個別に語りかけて下さっている「私があるあなたのために十字架にかかって死に、そして復活したのだから、あなたはあなたを捕えている弱さ、罪、問題から既に解放されているのだ」という宣言が響いているのです。そして私たちも、安息日すなわち主の日には、礼拝において、主イエスに言葉をかけていただいて、腰がまっすぐになり、神を賛美するという経験をするのです。